

ピグーの経済学 : "Income"を読んで

高橋, 正雄

<https://doi.org/10.15017/4474713>

出版情報 : 経済學研究. 17 (2), pp.1-52, 1951-06-30. 九州大学経済学会
バージョン :
権利関係 :



ピグーの經濟學

——“Income”を讀んで——

高橋正雄

はしがき

一 問題と定義

二 所得の生産

三 生産要因の配分と報酬

四 ピグー經濟學の性格

はしがき

この小論には二つの意図がある。一つは——私は学生の有志と A. C. Pigou, Income; An Introduction to Econo-

mics, London, Macmillan Co. 1949) を読んでゐるが、その趣旨ができるだけスピーディに英書を読むという点にあるので、内容には入つた議論ができない。何かの方法でそれを補ひ、学生に内容についての理解をも与える必要がある。それをこゝでこういう形で果そうというのである。もう一つの意図はこうである。私がはじめて経済学の論文というものを書いたのは国民所得についてであつた。二五年の昔である。それ以来というわけではないが、国民所得の研究を、第一部 国民所得の理論、第二部 国民所得の統計、第三部 国民所得の実用といったふうにしてやつて見たいというのが年来の一つの念願である。国民所得の理論は、当然に所得や国民所得に関する諸家の理論の批判を含むことになるが、というよりも、そういうことを通じて私の考え方をハッキリさせて行くことになるが、その中にはマーシャル、ビグーの理論の批判的研究もあるわけである。そういう私の仕事の一部にしたいということも、この小論の一つの意図である。

なお、こゝで私が取りあげているビグーの著書の性質についてかんたんに述べておこう。それはB六版、本文は一二〇頁にならない小著である。一九四五年の Lent Term に Professor of Engineering の依頼をうけその学生のためにケンブリジでやつた七回にわたる講義をまとめたものである。著者は序文でつぎのように言つてゐる、「本書の目的は、経済学者でない人々 non-economists に理解できるようにな形で、そして、もしできることなら、興味を覚えさせるような形で、経済学の主要な部分の概観 an outline sketch of an important part of economics を与えることである。第一章は、行論の展開にとつて論理的に必要なものではあるが、いずれかと言えば arid ではないかと危まれる。だから、読者のうちには第二章から始めた方がいゝ人もあるだろう。」また、エピソードではつぎのように言つてゐる、「この小

著は、所得という概念をめぐる書かれている。その点で、T・R・ヒックス教授がその著 *Social Framework* でモデルを示した見事な先例に従っている。経済学をやり出したばかりの学生や、一般の読者に、こういう方法で経済学の手ほどきをするということは、かなりの好都合な点があるように私には思われる。こういう方法は、例えば、「需要と供給の法則」という方法での手引よりもヨリ近ずきにくいものではないし、そして、統計で例証することができるので、ある意味では現実的であるからである。経済学の課題の大部分は、もちろん初歩のレベルでのこと *at elementary level* であるが、こういう線に沿って解説も討論もできる。しかも、論争のある問題に深入りすることなしにそれができるのである。一方「進んだ経済学」*Advanced economic theory* は、言うまでもなく、知りつくされている事柄の周辺のあたりを論ずることになりがちなので、経済学者たちが相互に異説を持つている問題を取扱う場合が多いということになる。こういう事態が、専門学者の意見の相異は、実際そうであるよりも遙かにひどいものだという印象を専門家でない人々に与えている。もつとも、戦時中に多くの経済学者がなした貴重な貢献が、この印象を大いにやわらげるのに役立つたことは確かである。しかし、それにもかゝらず、私は、経済学者の大部分の人々が実質的に意見の一致を見ている分野が、何んと言つても定性分析 *qualitative analysis* の関する限りは、大きなものだ、ということをし、いわばおちこち拾い歩きをしながら *ambulando* 言つておく方がいゝと思う。経済学の門にやがては入るかも知れない人々 *The would-be recruit* は、いろいろと雑音が耳にひびいて来るだらうけれども、それだからと言つて、自分は熊のいる動物園には入ろうとしているのだなどゝびく／＼する必要は全くないのである。」

このビグーの言葉は私には非常に興味がある。第一に、ケインズなどが「革命」^{アンチ・インスチテューション}を起した旧体制の実力者でもあり、象徴でもあるはずのビグーその人の言葉だからである。もしビグーの言うようであるならば、私たちは、ビグーのこの著を研究することによつて、ビグーたちの属する一つの大きな学派を研究することになるわけである。そして、このビグーの言葉は他の権威者によつても裏書きされているようである。^(註一)第二に、ビグーの言葉は、ビグーが elementary level の経済学と advanced economic theory とを別けている点で興味がある。進んだ経済学に行くには初歩の段階を十分に理解しておく必要があるが、私たちは、この書を研究することによつてそれができるからである。エレメンタリーな段階において進んだ段階の問題を論ずることは許されないこと言うまでもないが、エレメンタリーの段階での問題を論ずることはこの小著を対象としてもなされていくはずである。何ごとにおいても困難なのは「初めの歩み」だけとは限らないであろうが、そこでの段階で一致できないことには、進んだ段階までビグーたちとともに歩んで行くことはできなくなるか、そうでなくとも困難になるも知れないから、この小著の研究には十分な理由がある^(註二)ということになるであろう。

註一 Alfred Amonn はその Leitfaden zum Studium der Nationalökonomie, Bern, 1945 の第二部で経済学の史的発展を概観しているが、十九世紀後半における経済学の主要著作としてイギリス(？英語？)については、W. Stanley Jevons, Cairnes, Marshall のものについてビグーの The Economics of Welfare をあげているだけである。そして、この「厚生経済学」は今日でも大いに読まれている。

一 問題と定義

「経済学者が関心を持つている問題で大きいものゝ大部分は、国民所得と何かのつながりを持つてゐる。国民所得の大きさは？ 一国の所得生産能力が依存する主なる要素は？ 所得は種々の財貨から形成されており、あるいは、そういう財貨になつてしまふが、それらの財貨は相互にいかなる割合になつてゐるか？ そして、例えば、国民所得のどれだけが食糧、衣類、家屋、等から形成されるかということを決定する主なる要因は何であるか？ 国民所得はいかにして国民の間に分配されるのか？そして、この分配はいかなる要因に依存するのか？ 異なる時期の間には、国民所得はどういうふうに分けられているか？ 政府は国民所得についていかなる役割を演じてゐるか、また、演すべきか？ 等々。こういう問題に答へて行くことによつて、経済学が主として取扱つてゐる対象の概観を与えることができると私は思う。以下の諸章において私が展開しようと思うのがすなわちそれである」(一頁)

こゝに掲げられてある問題はいずれも重要であり、かつ興味ある題であるが、われわれが、初歩の段階において、まず明確にしなければならないのは、定量的な面ではなくて、定性的な面である。所得、あるいは、国民所得とは何か、が言わば定性的に規定されないことには、量的な論議には入り得ないからである。

ところで、第一章の表題は「国民所得——定義と測定」となつてゐるが、われわれの当面の関心は、「定義」の方にあ

るわけである。そもそも所得、国民所得とは経済学的にはいかなるものであろうか。ビグーが述べているところのうちで、定性的な行論をできるだけ忠実に辿つて見ることにしよう。

ビグーは、まず、貨幣所得と現物所得とを使い別ける、――

「誰でも、日常の会話で所得のことを口にする場合、大ていは貨幣所得のことを考えている。……しかしながら、この、貨幣所得という概念では十分ではない。なぜならば、人々が貨幣所得を尊重するのは貨幣所得それ自身のためではなくて、それで買うことができる財貨やサービスのためだからである。……要するに、ほんとうに意味のあるのは、貨幣所得ではなくて、貨幣所得が購買するものである。すなわち、経済学者の用語で言えば、貨幣所得 money income ではなくて、現物所得 real income ^(註1)なのである」(一一二頁)

註 real income は実質所得と訳されるのが普通である。それは、時期を異にして価格が変動する場合、それによつてモディファイされない「実質」を見ようというのである。その意味で、それは価格(価値)ではなく使用価値をとらえようとするのであるが、常に異なる時期を問題にしている。ところがビグーの場合には、同一時点において real income が問題とされる。それは「現物」と訳した方がわかりいゝように思われる。

この短い引用文のうちにすでにいくつかの誤り、または、不十分な点があるように思われる。その一、所得の定義としてイキナリ貨幣所得と現物所得を持つて来るのは誤りである。少くとも親切ではない。所得というものがいかなるものであるかという本質の規定――そういうことをするのが経済学における定義であるべきで、そうでなければ、英語なり日本

語なりの国文解釈ということになつてしまふであらう——がなされるべきであらう。そして、分類が行われるのはその上のことである。ビグーにあつては、所得とは何であるかゞ説明されないまゝに、所得の種類が論じられている。その二、ビグーは、貨幣所得はそれ自身のためではなくて、それが購買し得る財とサービスのために評価されると言い、問題なのは貨幣所得ではなくて現物所得であると言つてゐるが、これには一つの前提がある。それは、すべての所得が個人的消費のために支出される、ということである。貯蓄され、蓄積される所得について言うならば、意味があるのは、それによつて獲得できる「現物」ではなくて、「貨幣」だということになるであらう。現物（たる生産手段や労働力）は現物それ自身のために評価されるのではなくて、それが生み出す貨幣、しかもヨリ多くの貨幣のために尊重されるのである。これは、貨幣所得は所得として支出される部分と、資本として支出される部分とに別れるということを意味するが、ビグーにおいてはこの点が考えられていない。^(註)なお、この点まで考えて来ると、貨幣所得で購買される財とサービスには、個人的消費のためのものと、生産資本たるべきものとあるということになり、ビグーが前者だけを考へてゐるといふ点が、ビグーの言葉を使えば、awkward な感じをわれわれに与える。その三、すぐ以下のところでも触れるが、ビグーにおいては、少くとも今までのところでは、所得とそれを受領した個人の関係のみが問題とされ、経済社会全体の構造なり運動なりと所得の関係が考察されてゐない。つまり、総生産過程、あるいは、再生産過程の問題の意識がないのである。

註 この小論では取り上げないが、ビグーにおいては貨幣はすべて貨幣所得として觀念されてゐるかのようである。ビグーの本の第

第六章は「所得生産力の稼働比率——平均として、および、時を異にして」 The proportion of income-getting power at work on the average and at different times となつており、景気、あるいは、雇用の変動が論じられている。「経済学者たちの間にかんがりの見解の相違のある問題」とビグー自身言つてゐるが、そこでの敘述はさすがは大家を偲ばせるものがあり、ことに初学者にはいゝ入門である。しかし、景気変動の原因、あるいは、過程に関する学説をいろいろとあげながら、「貨幣事情、あるいは、そういうよりも、貨幣事情と貸金事情とを一しよに考えること」が重要だと言ひ、つぎのように述べてゐる。——「実業家は先き行きが有望だと思へば、その活動を大きくし、それを金融するのに、自分の残金を普通よりもヨリ頻繁に回転したり、銀行から貨幣を借りたりする。この結果、貨幣所得が拡大する、そして、経験が示しているように、それは現物所得——財とサービスの生産量——よりもヨリ速かに拡大するのが普通である。ところで、貨幣所得は現物所得の買入れにだけ出されるのだから、一般物価水準は、消費財の物価を含めて、とう貴する」(九三—四頁)所得たる貨幣も資本たる貨幣も一樣に貨幣所得と呼ばれ、個人的消費者によつて買入れられる「現物所得」——実は商品資本——も、生産資本となるべき「現物」——実は商品資本——もともに「現物所得」と呼ばれてゐる。再生産過程の分析において、経済学の誕生以来つまずきの石になつてゐるものにビグーもつまづいてゐるようである。

しかし、われわれは、余りに多くを最初の二頁に期待すべきではない。さきを読もう。さきの引用について、ビグーは現物所得の定義(?)を与える、——

「それでは、現物所得とは何か?こゝにマシヤルの広い一般的な説明を掲げよう。『一国の労働と資本はその自然資源に働きかけることによつて、年々、すべての種類のサービスを含む有形、無形の商品のある純量を生産する。The labour and capital of the country acting on its natural resources produces annually a certain net

aggregate of commodities, material and immaterial, including services of all kinds. これが、その国の眞の純の国民所得あるは收入、the true net national income or revenue あるは、国民分配分 the national dividend である。^(註¹)要するに、ある時期の現物所得は、その時期の間に生じた財とサービス——生活の必需品と便宜品——の純流入分から成るのである」(二頁)

註一 Principles of Economics, 5th edition, p.524.

こう述べた後、ビグーは直ちに「純」という言葉の重要性を説くのであるが、その前に、われわれには問題がある。少くとも科学としての経済学を学ぼうとする入門者ならば、つぎのような疑問が湧いて来るはずである。ビグー教授の講義はよくわかる。しかし、同じことは、原始共産制の社会にも、奴隷制の社会にも、そして、社会主義の社会にも、今日の資本主義社会にと同じようにあてはまるように思われる。今日までの人類が生活し、成長して来たのは、教授の言うように「純」の国民所得があつたからである。すなわち、それを全部消費しても「労働と資本」を従来の規模よりもヨリ貧弱にせず、その一部を生産的に消費するならば右の規模をヨリ大ならしめるような「国民分配分」と言つたものがあつたからである。社会主義社会においても事態は同じであろう。そうだとすれば、教授の言われることは、すべての社会経済の型に適用される一般的共通なことにすぎないのであつて、それを講義されることはけつこうであるが、それとともに、そのほかに、資本主義経済社会に特殊な事情の説明もなさるべきではないであらうか。

例えば、奴隷は、その現物所得を貨幣所得などの迂路を通らずに、牛馬とともに、主人から、主人の所得のなかから与

えられていたはずだし、封建社会の農奴は、これまた貨幣所得を問題にすることなしに、まず消耗した生産手段の回收分とともに自分の現物所得を確保し、その上で、領主の所得を供出していたはずである。資本主義社会においても、教授は、マーシャルとともに国民分配分の定義をあげているが、この分配分が国民に、したがって、例えば労働者に分配されて、眞の現物所得になるためには、雇用、賃金という道を通らなければならないはずである。その辺のところは、教授はどう説明されるのであろうか？——こういう疑問が起るはずである。しかし、われわれは、こゝでも余りに性急なのかも知れない。このまゝにして、もつと先きを行くことにしよう。

ピグーに対し疑問を提出することを続けるだけでは單調にすぎるから、その場その場で解決できそうな問題をいくつか取り上げて見よう。われわれの結論——そこへ行くまでの過程は以下に示されるであらう——をさきに言えば、ピグー教授は *advanced economic theory* には長じつゝるかも知れなうが、*at elementary level* の方は得意ではないらしいということである。

第一例——さきの引用にすぐ続いてピグーは言う「私はこの説明の中で「純」*net* という言葉を使つた。この言葉は、われわれに、現物所得の *inventory* を作るにあたり、同じものを二度も計算しないように注意しなければならない」と戒めている。例えば、諸君は、農牧業がその国の現物所得にいかなる寄与をなすかということに関心を持つていましょう。諸君は、ある年の分として、その国の農牧場がその年のうちに提供した牛肉、豚肉、羊肉、牛乳、小麦、大麦カブラ、タウデサ *mangel-wurzel*、スウェーデンカブラ等々の数量を書き上げ、それらを全部算入したくなるであ

ろう。しかし、そんなことをしたら、大へんな誤りを犯すことになる。なぜか、たとえば、大麦、タウチサその他のもの、かなりの数量は家畜によつて飼料として食われ、そして、その年のうちに生産された羊肉や豚肉に体化しているからである。諸君が豚肉をすでに算入したのなら、豚肉を作るために豚の肉体に入りこんだ飼料を計上してはならない。同じように、一年のうちに生産されたパンの数量を計算してしまつてゐるならば、生産されパン製造のために消費されてしまつた小麦を計上してはならない。これが「純」という用語のポイントである。一団の人々によつて生産される現物所得というのは、一年につき、あるいは、他の期間につき計算するとし、その総生産物 gross output のことではなくして、他の人から受け取つたもので、自分たちの総生産物の中に体化しているものを自分たちの総生産物から控除した残りのことである」(三頁)

英国で the Professor of Engineering の指導を受ける学生とはどんな教養を持つてゐるのか知らないが、経済学の入門者にとつてだけでなく、この説明は甚だ理解しにくいように思われる。ビグーの文章を一々辿りながらわれわれの見解を述べて行くためにつぎのように考えよう。かりに小麦の生産農場と、小麦を飼料として牛を飼ひ牛肉を生産する牧場(?)の二つを考えるとし、小麦の総生産高が一〇〇、——その内訳は、固定資本消耗分や原料の分が六〇、賃金の分が二〇、利潤の分が一〇、地代の分が一〇——、そして牛肉の総生産高が二〇〇——その内訳は、この牧場で前から手持の固定設備や消耗品の分が五〇、小麦生産農場から買つた小麦の分が一〇〇、賃金の分が、利潤の分が二〇、地代の分が一〇——だとしよう。

ピグーの考えをヨリよく理解しうるために、まず、この例の場合にとれだけの数量の所得が生産されたかを見ておこう。それは、小麦生産の場において二〇（賃金）プラス一〇（利潤）プラス一〇（地代）、すなわち、四〇である。牛肉生産の場では二〇（賃金）プラス二〇（利潤）プラス一〇（地代）、すなわち五〇である。両者合せて九〇である。小麦と牛肉の総生産高はそれぞれ一〇〇と二〇〇であるから、両者の合計は三〇〇になる。しかし、小麦の一〇〇のうち、前年から持ち越されている分が六〇あるから、小麦生産の場における今年の新生産、あるいは、純生産は四〇であり、牛肉の二〇〇のうち、前年から持ち越されている分が五〇、小麦生産の場から振替つて来た分が一〇〇であるから、牛肉生産の場における今年の新生産、あるいは、純生産は五〇である。こうして、両者の合計は、さきの九〇となる。こういうふうに見て来れば、極めてかんたんな算術ですむ程度の問題である。

それでは、この例について見るとして、ピグーは何を言っているのであろうか。小麦生産業と牛肉生産業からの所得を計算するのに、小麦の生産高と牛肉の生産高とを合計してはいけない、と言っているのである。それは確かにそうである。だが、(イ)なぜそうなのか？ (ロ)それなら、どうしたらいいのか。(ハ)については、ピグーは、小麦は牛肉になつてしまつてゐるのだから、と言うだけである。確かに牛が食つてしまつた小麦は、もはや人間が食うことはできない。そういう意味では、小麦は、生産手段（原料）であつて消費手段ではないのだから、賃金にせよ利潤にせよ地代にせよ、そういう所得の現物形態となることはできない。しかし、小麦生産の農場で生産され支払われる貨幣所得はどう考えたらいゝのだろうか。確かに、現物所得としては、小麦（牛が食つてしまつた）と牛肉を合算することはできない。しかし、それな

ら、小麦生産から生じた貨幣所得はどこに、そして、いかにて現物所得を見出すことができるのだろうか。ビグーは、生産物の現物形態にとらわされて、貨幣形態の方を、忘れていたのである。これは当然に、問題(ロ)につながつて来る。

(ロ)に対するビグーの答えは、同じくわれわれの例について見るとつぎのようになる。さきの引用の「一団の人々によつて生産される現物所得というのは……」というのは、牛肉生産高二〇〇から一〇〇を控除する、ということである。これでは一〇〇が残ることになるが、ビグーは、こゝではこんどはまず第一に、牛肉生産の場における五〇——マルクス経済学におけるC——を忘れることによつて、この場の所得を過大に計算している。第二に、小麦生産の場における所得(四〇)を抹殺することによつて全農牧業の所得を過少評価している。こうして、ビグーは(イ)と(ロ)に答えていないことによつて全く荒唐無稽のことを言つてゐることになる。なぜだろうか。それに対する答えは、古典的明快さをもつて、数十年前にマルクスの資本論と剰余価値学説史の中に随所に与えられてゐる。(それを紹介することは、こゝでは割愛しておこう。)

第二例——「……任意のある年に生産されたパンの中に体化している小麦は、パンに附加されたものではなくて、パンの一部をなしているものであることは誰にでも自明である。実際、小麦はパンの中に物として体化しているのである。It is physically embodied in it. しかし、ある産業によつて生産されたものが、他の産業によつて生産されるものに、小麦とパンの場合よりもヨリ微妙な仕方で in a subtler way 体化されるということも起りうる。一国の織布生産高を考えよう。明かに羊毛は、小麦がパンの中に体化しているのと全く同じ仕方で、ラシヤの中に体化している。しかし、それなら紡織産業で使用されている機械はどうだろうか。年々羊毛を紡ぎ、ラシヤを織ることによつて、

機械のある数量が消耗する。この消耗した機械は、羊毛と全く同じように現物的に *quite as really as the wool has done* ラシヤの組織の中に入り込んだのである。……」(三頁)。

こういう講義を聞かされたら、初めての人はどう思うだろうか。 *subtle* だの、パンの中に小麦が入り込んでいるのも、反物の中に糸が入り込んでいるのも、機械がパンや小麦に入り込んでいるのと全く同じことであるのだと聞かされて、理解できるであろうか。パンや織物の場合には、小麦も羊毛もものとして *physically* には入っているのである。機械についてどうして同じことが言えるのだろうか。 *quite as really as* と言われるだけでは理解に困難ではなからうか。ビグーは自分の言っていることに少しも *awkwardness* を感じないのかも知れないが、傍から見ているわれわれとしては非常な無理が、欠点があるように思われる。つぎのように考えたら、事態はかんたん明瞭に分析され、理解され、したがって説明されるのではなからうか。人間が生存・生活するために必要な財貨とサービスの生産は、商品生産社会、とくに資本主義社会においては商品の生産という形態を取る。そして、商品生産過程は、使用価値の生産過程と価値(剰余価値)の生産過程の統一である。したがって、この生産過程に参加する物的生産手段と労働力とは、この過程において、二つの作用を営む。一つは、使用価値の生産であり、一つは価値(剰余価値)の生産である。使用価値の生産に参加するという面では、小麦や羊毛のように、現物形態をもつて商品に入り込むものもあれば、機械等の労働手段のように、そういう意味で *physically* にはなく、目的とされる使用価値形成に他の仕方で貢げんするものもある。工場の建物のような貢げんの仕方もある。そこには、*subtle* とうような表現を用いる必要はなく、*すずれ* *quite as really as* と

貢げんするのである。たゞし really の意味はビグーとはちがう。価値（剰余価値）の生産に参加するという面では、労働力以外の生産手段は、価値を新たに生産するのではなくて、この生産過程に入り込む以前に持つていた価値を移転するだけである。それは、工場における原価計算の示すところであつて、こゝにも subtle な何ものもない。いずれも quite as really as である。

右のわれわれの説明は、マルクス経済学にしたがつてなされているのであるが、そしてこゝでは労働力については述べないが、これをビグーの説明と比較して、いずれがエレメンタリーな眞理をわがものとしているであろうか。そして、これだけの説明について見るだけでも、ビグーの経済学がいかなるものであるかど理解されるであろう。二重計算を避けるためには消耗した機械を国民所得から控除せねばならぬ、とビグーが言う時、それはたとえ経済学者ならぬ人々に言われている場合でも、わかり切つた一面の眞理を言うだけであり、ヨリ重要な面が触れられていないということになるであらう。

第三例——「……現物所得は、さきに私が記したように、ある時期における財とサービスの流れからできあがつてゐる。それゆゑ、明かにそれはその時期の貨幣所得とは同一物ではない。なぜなら、貨幣所得は貨幣受領の流れだからである。しかし、両者は関連はしている。ではその関連の性質はどんなものであらうか？大ざつば roughly に言つて、われわれは、ある時期における現物所得のすべての項目がそれぞれの生産者たちによつてそれぞれの商店に販売され、そして、それからそれぞれの消費者たち——もちろんこの人々は他の項目のものゝ生産者である——によつてこれらの

商店から購買されるというふうに考えてもいゝであらう。ある人は一週間に一〇ポンドの価値ある長靴を売り、そしてその一〇ポンドを小麦、肉および衣料を買うために支出するといったふうにある。このことは、貨幣所得とは、現物所得たる財とサービスに対してなされた支払であり、それ故に、これらのものの価値 *value* である、ということの意味する。こういう仕方では、貨幣所得は現物所得を代表する、*In this way money income represents real income.* 貨幣所得の一ポンド一ポンドに対して同額の価値ある現物所得が存在する」(六—七頁)

これに対してはつぎのことが言われるであらう。第一に、こゝでは労働者の所得はどう考えられているのであろうか。

労働者が一週間の労働力を資本家企業に一〇ポンドで販売し、その価格として一〇ポンドの貨幣賃金という貨幣所得を受領する場合、そしてこの貨幣で一〇ポンドの生活資料を購買した場合、どうなるのであろうか。ビグーの言うところをそのまゝ適用すると、労働者は社会に——ビグーの言う「商店」に——一〇ポンドの「現物所得」——労働という形で——を販売し、その代価たる一〇ポンドの貨幣同得で、こんどは自分が消費すべき一〇ポンドの「現場所得」を講入したということになる。ところで、(イ)労働者がこうして販売する労働力という「現物所得」のほか、(ロ)企業家が社会に販売する財とサービスから成る「現物所得」もあるわけである。一国の国民所得を計算する場合に、この(イ)と(ロ)とは合計さるべきであらうか。いまかりにこの資本家企業が消費手段の生産・販売者であるとし、同じくこの一週間にこの労働者の労働力を購入し運搬することにより三〇ポンドの「現物所得」を「商店」に販売したとしよう。この三〇ポンドのうち一五ポンドは固定資本や原料等の消耗の分、一〇ポンドは賃金の分、そして五ポンドは利潤の分だとしよう(地代は考えないでお

こう)。消耗した資本の分はこゝでは忘れろとし、この企業は「商店」に一五ポンドの「現物所得」を販売したことにしよう。この社会の全体の所得は一〇ポンドプラス一五ポンド、すなわち二五ポンドだろうか。ビグーの言うところをそのままに取ればこうなるはずである。しかし、マーシャルとともに「一国の労働と資本が天然資源に働きかけて……」と言っている時のビグーにとつてはこれでは awkward であるはずだ。

右のように二五ポンドになると考えると、労働者は一度は自分自身の労働力を「商店」に販売するところで「現物所得」を生産・販売し、二度目は企業家がこの「現物所得」を購買して生産的に消費して、つまり消費手段を生産することにより「現物所得」を「商店」に販売する場合にまた「労働者」ではないにしても「労働力」だか「労働」だかど現われることになる。それでいゝのであろうか。それではおかしいはずである。しかし、ビグーの考え方を現実に適用すればそういうことになる。資本主義経済での「所得」を問題にしているのに、資本主義経済の本質的條件である労働力や賃金のこととが考慮されていないとすれば、それは余りにもうかつであると言わねばならないであらう。第二にビグーは、長靴の生産・販売者と小麦・肉・衣料等の生産・販売者、要するに消費手段の生産者のみを問題にしている。しかもビグーの室は、單純商品社会の獨立生産者のことを想起させる。正しく考えられていれば、そういう例でも十分であるが、ビグーの場合はそうではないようである。これと結びつくかのように第三の問題がある。ビグーは商品の価値あるいは価格の中に含まれている消耗した固定資本や原料分のことを忘れている。つまり、生産手段のことを忘れている。だから、生産者が販売する一〇ポンドの長靴の代金がそのまゝ生産者の所得となり、したがつて、それが小麦・肉などの「現物所得」に支出されると考えているのである。確かに長靴・小麦・肉・衣料は消費手段である。だから、誰かの貨幣所得により購買・

消費されて「現物所得」となるしかない。しかし、これらの消費手段には、所得だけでなく、不変資本分も含まれているはずである。いつたい、ビグーは何を戸迷っているのだろうか。

右に引用したところを通じて、そしてその他のところでも、生産手段の回收分、マルクス経済学における不変資本回收分を、忘るべからざるところで忘れることはビグーの経済学の大きな特長である。そしてこの点は、これまた古くからマルクスによつて指摘されているように、古典派経済学にも、そしてその批判者たるはずのケインズ経済学にも共通する現象のようである。^(註)

註 ケインズについては私の「ケインズ一般理論の研究」(有斐閣、昭二六)第四章参照。

右に見て来たような誤りや欠点は、at elementary level とか、students beginning the subject (economics) とか、general readers とか non-economist とか would-be recruit (for economics) とかという理由で免責になるものであろうか。また、roughly に言つてゐるからだということが弁明になるであらうか。われわれはそうは思わない。初歩の段階においてはエレメンタリーなことこそエレメンタールに克明に單純に明瞭に解説さるべきだからである。そして、われわれが不十分ながら試みて来たように、右の諸点を明かにすることは決してビグーたちの言う advanced economic theory を必要としないのだからなおさらである。入門書とか手引とかいうものは、副次的な、攪乱的な條件をこそ省け、本質的なものは逃してはいけなはずである。

「定義と問題」ということではわれわれはビグーに満足しなかつたけれど、それはそれとして、さらに進んでビグーの

説くところを見ることにしよう。

二 所得の生産

さきに見たように、ビグーにおいては、「現物所得」というのは、もろもろの生産者によつて社会に、あるいは「商店」に販売される財やサービスである。そうだとすれば、発展した商品経済社会である資本主義社会においては、すべての生産物は——ビグーの言う財とサービスは——商品であるから、所得の生産ということは商品の生産ということになる。その際生産手段、あるいはマルクス経済学における不変資本がどうなるかという問題があるが、その点を忘れることにすれば、右に述べたようになるであらう。ビグー等が所得を中心にして経済学を展開することができるというのは、右のように考へてのことではなからうか。それはともかくとして、われわれはこれからビグーの言う「所得の生産」をめぐる諸事情を見ようとするのであるが、右のことを考へておくことは、行論の理解にいくらかは役立つであらう。

ビグーの著書の第二章は、「所得生産力を左右する国内の諸條件」Internal influences affecting income getting power となつてゐる。一国が孤立封鎖経済を営んでゐるとの仮定のもとに問題を捉えようといふのである。「まず第一歩として、われわれは一国の生産的諸資源 productive resources とは何であるかについての記述がほしい」と言ひて、ビグーは一つずつ述べて行く、——

「これらのものうちで最もハッキリしているのは、自然によつて与えられ、そのなかに人間が住んでいる物的環境で

ある。これは非常に多くのものを含んでいる。降雨量と日射量、植物を成長させ、動物を保育する力を持つ地表がある。また、肥えた谷間があることもあり、丘陵があることもあり、また水のない平地があることもある。魚を取ることや航行のできる川、湖および海がある。また、動力を提供することのできる滝、あるいはもつと厳密に言えば、水の落下に適した地形がある。自然資源のこの広汎なグループを全部ひとまとめにして古典派経済学者たちにたゞ一つの名称、基礎的生産要因たる土地 *the fundamental factor of production, Land* を与えた（一七頁）。

これについてのわれわれの見解はあとで述べるとし、さきに進もう。

「第二に、自然によつて与えられる基礎的生産要因と並んで、つぎに非常に重要なグループがある。自然の原料を成分とし *on the basis of nature's raw material* 人間の努力によつて作り上げられた生産要具および消費財がそれである。この項目には、道路、運河、鉄道、電信電話設備、工場建築物、家屋、水道、ガス発生工場、あらゆる種類の機械、熔鉱炉や工場を通過しつゝある半製品、倉庫や商店のなかに貯えてある完成品、農器具、等々が含まれる。種々雑多なものゝこの集合を一しよにして経済学者は第二の重大な生産要因たる資本、あるいは、より厳密には、現物資本 *material capital* と呼んでいる。この考え方を論理的に進めて行けば、人間によつて作られたもので富 *a stock of wealth* として保有されているものはすべてこのなかに計上することになるであらう。しかしながら、日常の用語と合せるために、経済学者は通常はこんなに広い範囲のものを含ませはしない。だからマーシャルはつぎのように提唱する、

「社会的見地から資本を構成するものとしては、土地以外のもので、日常の会話において普通に所得だと考えられてい

るものを生み出すものすべてを数えあげる。 to count as part of Capital from the social point of view all things other than Land which yield income that is usually reckoned as such in common discourse, として、政府の工場のような官公有になつてゐる同様なものも含ませる。土地という術語は、自然の恩恵で、所得を生む礦山、漁場等のようなものをすべて含ませる。そうすれば、資本は機械であれ原料であれ、また完成品であれ営業目的のために for trade purposes 保有されるすべてのもの、劇場もホテルも農場も住宅も含むことになる。しかし、現にそれを使用している人々が所有する家具や衣類は含まれない。なぜならば、所得税審査委員の慣行にも示されてゐる(註一)ように、前者は世間一般の人々によつて所得を生むものと通常は看做されるが、後者はそうでないからである。私は、このマシーナルの定義を諸君にお勧めする。しかし、諸君がこの定義を好むか否かにかゝわらず、この定義に教えられる諸君は恐らくはつぎのことに賛成されるであらう、すなわち資本は、かつて言わば文学的表現をもつて定義されたやうに「労働者階級から搾取された貨幣であつて、軍隊お雇いの裁縫師その他のしがない連中でも、これさえもらえば、狐狩の犬も飼えようし、自分の御先祖は溯ればノーマン王朝の貴人にいたるとホラを吹くことができる」といつたやうな貨幣ではないということに賛成されるであらう(一八頁)

註一 Principles of Economics, 5th edition p.78.

註二 Cobbett の言葉 Leslie Stephen, The English Utilitarians, vol.ii, p.131.

資本主義経済社会の分析・綜合たる経済学にとつては、本質規定という意味での資本の定義と分類は非常に重要である

はずなのに、ビグーは、マーシャルとともに、日常会話と日常用語にその資本論の拠点を置くものゝようである。それについてはいま論じないとして、マーシャルの資本のなかには、貨幣だの証券だの、それから工場のなかにある「労働」も含まれることになるはずであるが、どう考えているのだろうか。こゝで、つぎの引用をしておくのは興味なくはないであらう。――

「労働者たちが賃金のために労働する場合には、資本家は資本（こゝでは生産手段のこと）だけではなくて、労働の所有者でもある。もし、賃金として支払われるものを、一般の習わしにしたがつて、資本の概念のうちに含ませるならば、労働を資本と離して云々するのは不合理である。この意味では資本という言葉は、資本と労働の双方を含むのである。」^(註)

註 James Mill: Elements of Pol. Econ. etc. p.70. 資本論、第一卷、第二篇、第三章の註一〇。なお、つぎの言葉はこの事態をヨリ明瞭にすると共に、ビグー等の生産要因論の姿をも明瞭に映し出すであらう。生産要因が組み合されて所得が生産されることになり、ビグーの言う「発電所」（後出）の門をくぐると「さきの貨幣所有者は資本家として先に立ち、労働力所有者は資本家の労働者としてその後に続く――資本家は、これからのことを考えてニヤニヤしながら、かつ、商売のことを考えながら。労働者の方は、おずおずと、そして、いやいやながら、ちやうど自分自身の皮を売つてしまい、いまとなつては期待するのはなめし皮にされることだけ、という人のように。」（資本論、第一卷、第二篇、第四章の終）

つぎに、ビグーはマーシャルの定義がコベットの所論を反駁していると思つているようであるが、少しも反駁にはなつていない。ビグーたちの「定義」とコベットの「定義」とが一致しないというだけのことである。コベットが言わんとし

ている眞意は、資本は労働者から剰余労働・剰余価値・剰余生産物を搾取する。剰余価値が利潤に転化する過程は省くとして、ある資本が年に一割ずつの利潤をあげ、それを資本の所有者が全部個人的に消費するとすれば、一一年目からは資本もそれから生ずる利潤とともに「労働者階級から搾取された」ものであり、資本家がそれを手離して「貨幣」とすれば、その貨幣をもつて、恐らくはレントナーとして獵犬を飼ひ貴族に列せられることもできるであろう、というのである。講義の合間に、シヤレ飛ばされてすむような無意味な見解ではないのである。ビグーは、資本も土地も「所得を生む」yield income ものとしているが、なぜにそうなるのかの解明を行つた後に始めてコベットをヤユしうるのである。しかし、目に見える世界だけが、日常用語と所得税審査員の慣行に合致することだけが関心事であるビグーにとつては、およそそういうことは問題ではないのである。

最後に「労働」についてはビグーは何と言うであらうか。

「第三に、前二者と區別さるべきものとして人間自身の生産力 the productive powers of human beings themselves がある。すなわち、肉体力および精神力がある。種々の肉体労働をなし、それを種々の方面に向け、計画を作り、種々の用具を設計し、組織し、案梅し、コントロールする力がある。すべてのこれらのものを、最も広い最も包括的な意味にとつて、われわれは第三の重要な生産要因たる労働、あるいはヨリ嚴密には、労働力 labour power としてひとまとめにする」(一八一―九頁)。

ビグーは、このほかに第四として、そして「支配的な位置を占める」ものとして知識、思想をあげ、「始めに、そして

終りに、言葉（ロゴス）あり」と言つて第二章を結んでいる。しかし、ビグーも、この第四のものを無形資本 *immaterial capital* としてとくにかゝげるかどうかは第二次的な問題だと言つているから、われわれもこれには触れないことにしよう。

以上で生産要因の規定が与えられたとし、この三者は「所得を生産するもの」としてそれぞれいかなる作用をなすであらうか。

「……その数量が同一に止まつているにせよ変化するにせよ、いずれにせよ、生産諸要因のストックは、言わば発電所 *the generating plant* であつて、その作用によつて現物所得の年々の流れが生み出されるのである」（一九二〇頁）たゞこれだけである——これで「所得」が生産される過程が解明されたのである。 *so to speak, the generating plant* ですんだのである。

さきにわれわれは国民所得に関するマーシャルの定義についていくつかの疑問を述べたが、同じことをこゝでも繰返さねばならない。だが、こゝではその代りに、資本論からのつぎの引用をしよう。マーシャル、ビグーの論と比較対照するならば、われわれは二つの経済学派の相違をハッキリと理解しうるであらう。

「労働というものは、まず、人間と自然の間の一つの過程である。人間が自然相手に行う自分の新陳代謝を自分自身の行動を媒介として行い、それに秩序をつけ、それを左右する一つの過程である。人間は自然の素材そのものに対して自分でも一つの自然力として向いあう。人間が、自分の肉体についている自然力たる腕やスネ、頭（ビグーの言うロゴス!?

——高橋）や手を運動させて、自然の素材を自分自身の生活に使えるような形態としてわがものにする過程である。人間はこの運動により自分の外にある自然に働きかけ、そして自然を変えるのであるが、それによつて同時に自分自身の自然をも変える。人間は自分の自然のうちに眠つてゐる潜在力を發展させる、そしてそこから出て来るいろいろの力の作用を自分自身の役に立たせるのである。……

「労働過程の單純な條件は、合目的な活動、すなわち労働そのもの、その対象、そしてその手段である。

「食べものやすく使える生活手段をそもその始めから人間に供給する土地（經濟學的には水もこれに含ませる）は、人間の行為をまつことなしに、人間労働の一般的対象として存在している。土地と密着している状態からたゞ労働を加えられることによつて取りはがされるものはすべて、天与の労働対象である。自分の世界である水から引き離され、捕えられる魚がそうであり、原始林で切り倒される樹木がそうであり、その鉋脉からはぎ取られる鉋石がそうである。ところが、もし労働対象がそれ自身すでにそれ以前の労働によつて言わば濾過されているならば、われわれはそれを原料と名づける。……

「労働手段というのは、労働者が自分と労働対象の間に差し入れるところの、そしてこの対象に対する彼の行為の伝導者として彼に役立つところの一つのもの、あるいはいろいろのものゝ複合体である。労働者は、これらのものを他のものに對する手段として彼れの目的に応じて作用させるために、これらのものゝ機械學的、物理學的、また化學的な諸性質を利用する。労働者が直接に握つてゐるものは——自分自身の肉體の諸器官だけが労働手段として役立つような、

でき上つてゐる生活手段、例えば果実を取る場合を論外とすれば——労働対象ではなくて労働手段である。こうして、自然にあるものがそのままで労働者の活動の器官となる。すなわち、バイブルの言葉に反し自分の生來の姿を延ばして、自分自身の肉体の諸器官に附加するところの器官となる。土地は彼の生活手段の本源的倉庫であるのと同じように、彼の労働手段の本源的倉庫である。それは彼に、例えば投げたり、擦つたり、押したり、切つたりなどする石を与える。土地そのものが労働手段なのであるが、それが農業における労働手段として役立つためには、そのほかに土地以外の労働手段の全系列と労働力の比較的に高い發展が前提となる。およそ労働過程というものは、ほんの少しでも發展するや否や、前もつて労働を加えられてゐる労働手段を必要とする。……労働手段の使用と創造とは、萌芽としてはすでにある種の動物にも見られるけれども、とくに人間の労働過程の特長である。だからこそフランクリンは、人間を道具を作る動物と定義している。……労働手段そのものうちでは、その総体を生産の骨骼系統および筋肉系統と呼んでいゝような機械学的な労働手段の方が、たゞ労働対象の容器としてのみ役立つような、そしてその総体は全く一般に生産の脉管系統と呼ばれるような労働手段、例えば管、桶、籠、壺等々よりも、社会のそれぞれの生産時代の特長を示すものとしてヨリ決定的である。化学工業において初めて、これらの容器が重要な役割を演ずる。

「広い意味にとれば、労働過程にはその手段として、労働の作用をその対象に媒介するところの、そして、したがつて何んらかの仕方ですら労働の伝導体として役立つところのものゝほかに、労働過程が進行するためにおよそ必要とされるすべての対象的条件が計上される。……この種のもので一般的な労働手段はやはり土地それ自身である。なぜなら、

土地は労働者にその立つ場所を与え、また彼れの労働過程に作業の場所を与えるからである。この種の労働手段ですでに労働によつて媒介されているものには、例えば、作業の行われる建物、運河、道路等々がある。」

もつと詳しく、そしてもつと長く引用したのであるが、それはやめてつぎのことで満足することにしよう。

「われわれがかんたんで抽象的な諸契機において述べたような労働過程は、使用価値を生産するための合目的な活動であり、人間の欲望のために自然にあるものを占有することであり、人間と自然の間の新陳代謝の一般的條件であり、それゆえにこの人間生活のどの形態からも独立したものであり、むしろそのすべての社会形態に共通しているものである。……」

こゝまでは、かんたん、かつ抽象的な労働過程の説明である。そこには、ビグーにおけると同じように、三つの生産要因が登場せしめられているが、これだけのところでもすでにわれわれは、マルクス経済学とビグー経済学の相違——敢て正否とは言わないとして——を見出しうるであらう。

ところが、問題はこれからなのである。「どの社会形態からも独立している」ような、あるいは、「すべての社会形態に共通な」ような規定をもつてしては、資本主義社会における「所得の生産」事情は解明されないからである。しかるに、ビグーにおいてはそういう問題は意識しては提出されない。

そこでわれわれは、ビグーの代りにマルクスをして語らしめることにしよう。

「労働過程は、資本家による労働力の消費過程として営まれるとなると、二つの独得の現象を呈する。

(第二に)労働者は資本家の統制のもとで労働する。そして、彼れの労働は資本家のものである。資本家は、労働が整然と行われ、そして生産手段が合目的に使用され、かくて原料が浪費されず、労働用具が大切にされる、すなわち労働において使用されるに必要なだけ損じられるにすぎない、そうなるように監視する。

第二に(労働過程の結果たる)生産物は資本家の所有物であつて直接の生産者たる労働者のものではない。資本家は労働力の、例えば一日分の価値を支払うとしよう。だから労働力を使用することは、資本家が一日間だけ賃借りした労働力以外の他のどの商品、例えば馬を使用するのと同じように、その一日じゆうは資本家のものである。商品の使用は商品の買手に属するが、労働力の所有者は、自分の労働を手渡すことによつて、実は自分が売つた使用価値を手渡すだけのことである。労働者が資本家の作業場には入つた瞬間から、彼の労働力の使用価値が、すなわち、その使用たる労働が資本家のものとなつたのである。資本家は、労働力の購買によつて労働そのものを生きた酵母として、死んだ、やはり彼のものである生産物形成要素に合体させたのである。資本家の見地からすれば、労働過程とは、彼れが購買した商品たる労働力——彼れがこれを消費し得るのはたゞそれに生産手段をあてがうことによつてのみである——を消費することとに外ならない。労働過程は、資本家が購買したものゝ間の、彼れが所有するものゝ間の過程である。それゆえ、この過程の生産物は、ブドー酒倉の発酵過程の生産物と全く同様に、資本家の所有に属するのである。」(以上の引用、すべて資本論第一卷第三篇第五章第一節労働過程から)

われわれはこゝで再びビグーの「言わば発電所」みたいなものという説明、社会の生産者——ビグーにおいてはすべて

の人が、したがつて労働者(!?)も、生産者である——が長靴、小麦、肉、衣類を「商店」に販売するという説明を想起すべきである。そして、以上にわれわれが引用して来た資本論の説明は入門者にとつても決して「進んだ経済理論」ではないことを思うべきであらう。

資本主義社会における「所得の生産」過程は労働過程と価値形成過程の、さらに労働過程と価値増殖過程の統一である。それゆえにマルクスは右の第一節労働過程について第二節で価値増殖過程を論じている。われわれは、こゝでは、ビグーにおいてはそういうことは全く問題となつていないことを記するに止め、右の第二節を読むことは読者の課題として残しておくことにしよう。

ビグーにもどうう。生産の三、あるいはロゴスを含めて四要因を数え、それから「いわば発電所」の理論を展開した後、ビグーは、一国の現物所得生産力を左右する諸條件をさらに列挙して行く。第一に、一国の所有する生産諸要因の量の大小、第二にそれぞれの生産要因の内部における分業、あるいは特殊化 Specialization である。第一には触れないとして、第二については、(イ)人間には——土地についてもそうだが——先天的に才能の相異があること、(ロ)それがなくとも教育と訓練をすることによつて特殊化が行われ、さもない場合よりも生産高の増加することが、アダム・スミスの言葉を引用して語られている。なお、生産手段(主として労働手段)の標準化 standardisation (労働過程)の分化。がヘンリー・フォードの言葉(my Life and work)によつて語られている。しかしビグーは英国人らしく、あるいは老大家の

たしなみを示しつゝ、何ごとも行き過ぎはいけないということを附加するのを忘れない。「岩山登りのエキスパートではあるが、氷雪の方ではズブの素人というような人間は、アルプス登山隊にとつては大きなハンディキップである。」「肝臓のことしか知らない外科の大家は、腎臓が悪い患者の肝臓を切つてしまうかも知れない」(二四頁)。しかしまた、一芸の専門家になるよりは、何んでもやれるということが必要で有用な場合もある。例えば「商務大臣、陸軍大臣、文部大臣、大藏大臣、印度省大臣、海軍大臣というふうにならば明日えと転々と変る政治家の場合の「生産要因、労働」の如きがそうである。

ビグーは、H・G・ウェルスの *The First Men in the Moon* の面白う話を引きながら、今日の社会では、政府が法令によつて強制するのではないのに、どうして人々が好んで分業あるいは專業を押し進めるのかと自問し、それに対する回答を与えている。第一に、そして、なかならず人間に特有な交換性向 *First and foremost is the disposition peculiar to mankind to truck, barter or exchange* である。これを読んで誰でもアダム・スミスを思い出すであらうが、そしてビグーは、哲学者と街の運送人とは性来は、マステイフ、グレイハウンド、スパニエル、シェパード(?)という種々の犬が相互に違うほどは違わないのであるが、人間は交換本能があるために相互に特技を磨いて相互に利益し合うことができるのに、犬の場合はそれが無いと言つてゐるが、人間が交換するようになったのは、人類の歴史においては極めて最近の短い期間のことではないだろうか。また生産手段の私有がない社会では、ビグーの意味では交換はなくなるはずであるが、それは人間に特有な性向を圧殺することになるのだろうか。いくら入門書としてあつても、ビグーの

説明は歴史にも理論にも反しそうである。

交換本能と言つても、最初はそれは眠つてゐるのかも知れない。そこでそれを目ざまし、能動化させる條件がなければならぬ。生産力の發展、分業、私有財産というのがそれかと思うとピグーは、恐らくは英國經濟人の「日常會話」に忠実に「市場の大小」を第二の條件としてあげる。第三には交通通信施設の發達、第四には法制の整備、第五には、一般に授受される交換手段（貨幣）、第六には、科学と技術がある。第七に、企業の大きさの適正の問題がある。國民所得を論じて來て企業を取り上げるのは私には始めはおかしいように思えたがそうではない。ピグーによれば、平均生産費を極小ならしめるような規模が企業の最適規模 optimum size である。そして「象とアナ蜂の最適規模」が相互に異なるように、製鉄業と紡績業とでは企業の最適規模は異なるけれども、それぞれの部門にはそれがあるはずである。そして一国の生産諸要因がそういう最適規模の企業に配分されていれば、一国の生産諸要因は少しも浪費されず、したがつて、「現物所得」も極大になるというのである。そして、このことが現実となるのは競争が完全に行われる場合である。いつものことながら、ピグーにとつては生産費は、したがつて資本主義經濟は所与の條件となつてゐるが、そのことには目をつぶつて、こゝでは、完全な自由競争のもとでは「平均生産費」が極小となるということ、そして恐らくはそれが市場價格（価値ではないけれども）に等しい（？それを規制する？決定する？）という論理につながつてもおかしくはないということ——そういう思想をピグーにも認めうることを注意するだけにしよう。

三 生産要因の配分と報酬

ビグーの著書の第四章は「所得生産力の各種生産部門への配分」[The allocation of income-getting power among different sorts of production] となり、第七章は「所得の人々への配分」[The distribution of income among people] となっている。主としてこの二つの章によりながら、生産要因の所得、すなわち土地——地代、資本——利潤（利子）、労働——賃金に関するビグーの所論を見ることにしよう。

ビグーは、土地と資本と労働の三生産要因のうち、詳細な統計があるのは労働についてだけだという理由で、労働について大いに述べている。「所得の生産」についても「分配」についても、この三者は名称がちがうだけで、本質はちがわないという理論に立てば、労働について言えることは他の両者にも適用できるわけである。この三者と「所得」の関係については本節の後半で触れるとし、まず生産力の産業部門間への配分を見よう。私の理解した限りでは、以下に見ようとするビグーの所論は非常に合理的であり、明快であるように思われる。そしてそれだけにビグー経済学の性格も限界もそこにハッキリ現われているように思われる。

ビグーは産業および職業への労働力配分 *allocation among jobs and industries* はいかにして行われるか、という問題を提起して言う、——

「……人々は自分の仕事を自分で選ぶなり、あるいは親たちが子供の職業を選んだりするであろう。この大勢の別々の

個人の選択の背後には、いつたい何があるのだろうか？ 例えば発動機械工の数が現に統計に出ているようなものであつて、その一〇倍でもなければ、一〇分の一でもないというのはなぜだろうか？ われわれの経済構造での煉瓦の配列を支配する力は何だろうか？そしてそれらの力はいかに作用するのだろうか？そこには、経済学者が便宜上供給と需要という二つの大きな項目に分類している二組の力が働いているのである。私は、まず供給側の諸力を別々に、ついで需要側の諸力を別々に、そしてその上で、この二組の力がどんな仕方で組み合わされているかを述べることにしよう。

「供給の項目に関することとして、まず多くの人間——そのすべてが同一の能力 the same quality and capacity を持つている（こゝでわれわれは資本論における社会の單純、平均、あるいは標準労働のことを想起しておこう——高橋）——が種々雑多な場所や職業でいろいろと就職先きがあつて迷つてゐる場合を考えよう。ある場所なり職業なりでの就職から得られる純利益 the net advantages が他の場合で得られるものよりも目立つて大きいなら、人々は第一の方を去つて第一の方に向かうとするであらう。they will tend to move away from the second to the first なぜなら、当然のことながら人々は、自分たちのなしうる努力に対し最良の報酬を得ようとするからである。人々には、場所と職業を異にするに依じて得られる純益が少しでも異なる間は、こういうふうにして右往左往しようとするであらう。ヨリ有利な就職先きで仕事を求める人の数が多くなれば、そこでの支払率 the rate of pay はそれに依じて低落する。反対に、ヨリ有利でない就職口から人々が去るに依じて、労働の稀少性が感じられるようになり、そこで

の支払率はとう貴する。こういうふうにして、それぞれの場所や職業で自分のサービスを提供しようとする人々の数は、それらのいずれにおいて得られる純益も、他のいずれにおいて得られるものとくらべて同じである、あるいはほとんど同じである、そうなるように調整される傾向があるということになる。アダム・スミスはこの点をつぎのように述べている。『労働と資本の各々がそれぞれ使用される就業口の異なることから生ずる利益と不利益の総体は同一地域では完全に同一であるか、あるいは等しくなるという不断の傾向がある。もし同一地域で、ある就業口が他のものよりも明かにヨリ有利だとかヨリ不利だとかいうことがあれば、多くの人々が一方の口には密集し、他方の口からは離れ去る結果として、その利益は他の就業口における水準と同じことになるであろう。少くともこれは、事柄がその自然の成行を辿るに委されている社会、完全な自由がある社会、そしてすべての人が自分に適していると思う職業を選ぶこと、また適当だと思えばいくども職業を変えることにつき完全な自由を持つている社会、——そういう社会での事態であるであろう』この一般原則は、私が上に試みたように、非常にかんけつに述べることができる。^(註二)……」(五六—七頁)

註一 Wealth of Nations (scott's edition), vol. i, p.101.

註二 ビグーは「同一の性能」を持つ労働者という規定をした後、それを現実に近いモメントとして、(イ)人により先天的に性能が違ふ、(ロ)訓練と教育が違ふ性能も違つて来る、そのための「特別な費用」がかかるなら「純利益」も大でなければならぬと言つてゐる(六〇—二頁)。なお、人により能力が違ふなら、「労働の単位」をきめて、それで現わせば問題は同じことになるとも言つてゐる(六六頁)。「純利益」についても同じ趣旨から修正が加えられている。こういうことを言つてゐる場合のビグーは、社会の内的

本質的性格をとらえる場合の当然の措置ながら、さすがは古典派経済学の祖国の人だと思わせるものがある。しかし、言うまでもなく、類似はそこだけのことである。さらに掘り下げて「労働力の価値」には行かないのである。

つぎに需要の方面の一般原則についてビグーの言うところを聞こう。

「こゝで根本的に重要なことは、どんな賃金率にせよ、それが与えられているとして、その賃金率で需要されるだけの数の人間——その能力も与えられているとして——か雇主主たちによつて雇われ、そしてそれぞれの産業に配分される傾向がある、と云ふことである。 The fundamental thing here is that, at any given rate of wages, that number of men of given quality tends to be engaged by employers, and so allocated to any industry, which is demanded there, at that rate of wages. (六三頁)

これだけのことで、任意のある賃金率においては需要されるだけの「労働」が雇われるという自明(?)のことが言われているように思われる。それで、さき供給の場合には註記するに止めたが、こゝではビグーがこの原則をふえんするの聞くことにしよう。右の引用にすぐ続けて言う、――

「この原則を展開するには、われわれはある賃金率である産業においていく人の人が実際に需要されるかを決定するものは何であるかを研究しなければならぬ。……

第一に、ある与えられた能力の、与えられた数量の労働に対する需要価格は、一般の世人がその産業の生産物を欲すること切実であればあるほど、ヨリ高いであろう。そして、したがつて与えられた賃金率のもとでは、ヨリ多量の労働

が必要とされるであろう。ヘイアピンを使いつけていた婦人たちがこんどは口紅を愛好するようになれば、やがて口紅を作る人はヨリ多くなり、ヘイアピンを作る人はヨリ少くなるであろう。

第二に、第一と同じ原理で、その産業の生産物を欲しがるのが裕福な人々であれば、ヨリ多量の労働が必要とされるであろう。何となれば、言うまでもなく貧乏な人間がいくら切なる欲望を持つていても、富人がほんのほどくゝの欲望を持つ場合よりも遙かに少いものを購買するにすぎないから。……

第三に、生産技術の改良等によつて、一單位の労働がヨリ多くのものを生産するようになったとしたら、それはその産業で必要とされ、そしてそれに配分される労働者の数に對しどんな影響を及ぼすであろうか？この問題に對しては單純なイエス・エンド・ノー式の答はない。……もしその生産物に對する人々の需要が非彈力的であるならば……。これに反して、非常に彈力的であるならば、……一般的にはわれわれはつぎのように予期していゝであろう、ぜいたく品を生産する産業での能率増進はそこで雇われる労働をヨリ多くするであろうが、生活必需品を生産する産業での能率増進はそこで雇われる労働をヨリ少からしめるであろう。

「第四に、もしある商品が自由競争のもとで生産されているとすれば、雇主たちはそれを生産するために労働をつぎの点まで、すなわち生産された商品の最後の單位の販売価格がそれを生産するに必要とされる労働者の賃金——われわれは他の生産要因を無視する——とちようどバランスがとれる点まで、雇うであろう。例えば、一單位の労働が一日の間に生産物二單位を生産するならば、生産物の価格はその労働者の日賃金の二分の一に等しくなる傾向があるであろう。^(註)だ

が、独占の諸條件が存在するならば、生産高を減じて価格を引き上げる方が雇主の利益になるであろう。その結果は、生産物の価格は労働者の日賃金の半分よりも高く、公衆によつて購買される分量はヨリ少く、生産される数量もヨリ少く、そしてそれを生産するために雇われる労働の数量もヨリ少いであろう。それゆえ、どの産業においても独占が生ずるということは、その産業が自由競争の條件で営まれている場合よりもヨリ少い労働が必要とされ、配分されるということを意味する。」(六二―四頁)

註 労働力と労働の問題には触れないことにしての上であるが、ビグー等の経済学者がこういうことを言うのに対し、今までの私は、しかし、それはその企業家の個別的事情であつて、ほかに生産條件のより良い、あるいは、より悪い企業があるはずだから、論者のようにはならない。否、なるかならないかは、この個別的企業家の條件で決定されるのではなくて、すべての企業家の、すなわち、社会の條件で決定されるのだ、というふうに言つて来た。しかし、この私の言い方は公正を欠くように思われる。これらの論者は、いや、自分たちも、マルクスと同じように、社会的に平均的な條件の企業を取り上げているのだと言つているはずだからである。ビグーを読んでいると、そうなるような気がする。そういうふうに「公正に」読んで、その上で眞の批判が展開さるべきであろう。

ビグーが、所得生産の要因としての労働について供給の側から、ついで需要の側から言うことを聞いたわれわれは、両者の交錯について聞く順序である。こゝは、ビグー等の経済学家の正門玄関とも言うべきものである。われわれは注意深い入門者でなければならない。

「いまや私は、需要の側からいままで述べて来たことゝ、供給の側からさきに言つたこととの關係をハツキリさせる試

みをしなければならぬ。誰かゞ、私は種々の産業部門間への労働の配分を説明するのに、始めは一方の側から出発して一つの説明を与え、つぎにそこを離れて、こんどは他の方面から全く別な説明を与えた、というふうに考えているかも知れない。しかしそれはそうではない。どちらの側からせよ一方だけで説明するということは不可能である。そのことをわからせるのは容易なことである。供給側の諸條件が決定するのは、与えられた能力のこれこれ数の人間が異なる職業にどう配分されるかと言えば、それらの部門のすべてにおいて得られる純利益——賃金率その他——をおよそ同一ならしめるに必要であるように配分される傾向があるということである。ところが、この供給側の諸條件は、右の必要である数とはどれだけであるかを決定しない。例えば、一般世人が自転車欲することは甚だ強いが、帽子に対してはおだやかであるということであれば、自転車製造業と帽子製造業とで賃金が同一であるためには、自転車製作に従う人々の数が多くなければならぬし、帽子の方には少数の人だけでいいであろう。しかしながら、もし世人が嗜好を変え、自転車は少く、帽子は多く欲しがるということになれば、二つの産業での賃金が同一であるためには、こんどは自転車製作には少数の人だけが従つていればよく、帽子の方には多数の人が必要だということになるであろう。このように、供給側の諸條件だけでは、労働がどう就業先きに配分されるかを決定することはできない。他方、需要側の諸條件が決定するのは、任意のある職業において、ある賃金率が与えられている場合、その職業に配分される労働者の数は、それだけの数の労働者に対する需要価格を右の賃金率に等しくするような数であろうということである。ところが、需要側の諸條件は、それぞれの産業における賃金率^{（註）}が何んであるか、あるいはそれら賃金率が相互にどう関係になる

だろうか、ということについては何ものをも決定しないのである。それゆえ、需要側の諸條件はそれだけでは、供給側の諸條件もそれだけではできないと同じように、労働が種々の産業の間にいかに配分されるかを決定し得ないのである。それには、二組の諸條件が必要とされる。言い換えれば、種々の産業の間への労働の配分は、供給の諸條件だけによつてもなく、需要の諸條件だけによつてもなく、両者の交錯によつて決定されるのである。

註 需要側の諸條件は賃金率を決定しないという表現は、それを決定するのは供給側の諸條件だという意味を持つものとして興味がある。さきに見たように特別な費用を要する「労働」はヨリ多くの「純利益」を与えられねばならないとビグーは言う。また、他のところでは「……いかなる場合にも、賃金がそれ以下には下り得ない非常にハッキリした底がある。それは、一部分は、合理的賃金は何ぞやについての世人の感情により、一部分は、何もしない場合でも、失業保険基金からある最低額を受け取ることをあてにしているという事実によつて与えられる」（九八頁）と言っている。こゝから、労働ではなくて労働力の価値、あるいは、価格という理解にいたるのはそんなに遠くはないはずである。しかし、ビグーにおいてはそうではない。本節の後段で論ずるが、生産要因としての労働の報酬のところに來ると全く別なことが言われるのである。

「このことを決定的に明にするために、与えられた能力を有するX人の労働者が帽子製造業に、Y人の労働者が自転車製造業に従事している状態から始めるとしよう。その場合には……帽子製造業における賃金はそこでX人の一單位あたり需要価格と等しく、自転車製造業における賃金はそこでY人の一單位あたり需要価格と等しいであろう。このことは、需要側の條件を満足させる。しかし、この結果として、与えられた能力を有する一労働者が帽子業でよりも自転車でヨリ多くを得ることができるならば、人々は帽子業から自転車業の方に移動しようとするであろう。そしてどちらで

も同じこと、という関係ができるまで移動し続けようとするであらう。こうして供給側の諸條件は充される。しかし、だからと言つてこのことは、需要側の條件はもう充されようがないということ、両方の産業の労働者たちがその需要価格をもう支払われないということを意味するのではない。何となれば、労働者の数が変わにつれ、新しい労働者に対する需要価格は、それまでの労働者に対する需要価格と違つて来るからである。要するに、人々はこういうふうに移動したのである、すなわちどの産業においても賃金率は需要価格とやはり等しいが、これらの需要価格そのものが労働者数の変化によつて變つて来て、すべての産業において第二段階として生じた賃金の同一という事情——同様の能力の人々には同一賃金という事情も、ちろん能力を異にする場合にはそれだけの差等をつけて——に適合するように移動したのである。このようにして、供給側の事情と需要側の事情とが共働して co-operate 労働が諸産業の間にいかに配分さるべきかということを決めるのである。まさに、マーシャルの例話を借りるならば、鉄の二つの刃が共働して反物を切るように、である。どちらがどちらの後塵を拜すということがない。両者ともに同一の榮光のうちに支配したものである」(六四—六頁) とうして、需要供給によつて、こゝでは取引される数量の決定が問題なのだから、需要価格供給価格によつて、各産業部門への労働の配分が決定されるという事情が老大家のたんたんたる言葉によつて初学者にもわかるように説明される。この点には誰も反対するものはないであらう。たゞ問題は、この「需給の均衡」に資本主義経済分析としての経済理論においていかなる地位を与えるかということである。すなわち、この均衡が成立する過程だけでなく、それが成立している状態における資本主義経済を定性的に分析すること、均衡したからこうなつたというのではなく、なぜそこで均衡したか

を、需要供給を隠れみものとしてではなく説明するかどうかということである。

ピグーは、労働の価格、需要価格、供給価格を使うことによつて労働の配分を説明したが、つぎにこの価格についてはいかなる説明をするであろうか。いまや「生産要因の報酬」について学ぶことがわれわれの課題である。

「……人々の間に所得が分配される仕方は、さしあたつては immediately 二組の事実に依存する。一つは生産力のそれだけのもの、すなわち労働力、資本、土地——そしてそれぞれの小区分のもの——がその一単位あたり得るところの支払率 *the rates of pay*、一つはこれらの生産諸要因の所有が人々の間に配分されている仕方。それ故、きゆう極的には ultimately 第一に、それぞれの生産要因の支払率を決定する諸事情に、第二にこれらの生産要因の所有の各人間への配分を決定する諸事情に依存するのである。この二組のうちの第一のもの——通用の言葉を使えば、生産要素間への所得の分配を決定する諸事情——の議論は、長い間経済学の重要な部分を占めて来た。第二のものは、経済学と一般社会学との境界線にある。…」(一〇四頁)

言うまでもなく、われわれの関心は、こゝでは、第一のものについてである。ピグーに聞こう、——

「……問題の主要な点がハッキリするようにとすることを考えて、どちらかというと非常に乱暴な單純化をやろう。現実の生活では非常に多くのそれぞれ異なる財貨やサービスが生産され、販売されているが、そのことを無視し、たゞ一つのもの、例えば小麦しかないと考えることにしよう。この模型を使えば、分配を論ずるのにこの唯一のもの、すな

わち、小麦の量をもつてするのが自然であり、したがつて貨幣を持ち込む必要がない。この模型のもとで何が起るかはずぎのようにスケッチすることができるであらう。いろいろの種類の労働、同じく資本用具 *Capital instruments* 同じく土地から成るすべての生産要素が共働して、年々生産される小麦の純所得総額を生産するであらう。その場合、各生産要素のいずれの單位もがすべての他のものによつて助けられる——例えば労働者がその道具によつて助けられるように——から、ある生産要素の数量が多ければ多いほど——他の生産要素の数量が与えられている場合に——その生産要素のもう一單位を附け加えても、または一單位を取りのけても、全体の生産量に及ぼす相違はヨリ少いであらう。なぞなら、一〇〇〇單位もの生産要素がすでに働いている場合には、それが僅か一〇〇單位しかない場合に比較して、この生産要素の追加的一單位が他の生産諸要因から受ける助けは少いからである。もし、資本と土地の存在が与えられているとし、労働が非常に豊富ならば、も一人の労働者を附け加えることによつて生ずる総生産量の相違は、労働が非常に稀少である場合に比して、非常に小さいであらう。同じことは、機械や土地についてもあてはまる。右に言つたすべてのことは、つぎのように表現することもできるであらう、すなわち他の生産要因の数量が与えられている場合、ある生産要因の数量が追加されても、その結果たる生産高は遞減するであらう、というふうにある。ところで、それぞれの要因は産業管理者たち——この人々はこれらの要因を雇入れることによつて利潤を得ようと目指している——によつて雇われるのだから、これらの要因の各々に提供される一單位当り支払率——小麦で計つての——は生産要因のため一つの單位を加えたり除いたりすることによつて生ずる生産高の差額に——競争という條件のもとでは——近づくであ

ろう。その結果こういふことになる、すなわち他の生産要因の数量が与えられていれば、ある要因の一単位あたりの支払率——小麦での——は、その要因が豊富であればあるほど、ヨリ小さいであろう、ということになる」(一〇四—五頁)

この、決して長いとは言えない引用文に示された説明によつて、所得論の、したがつて国民所得論の最も重要な点が、——一般的、あるいは一面的にはあるにしても——解明されたことになるのである。ビグーの言うように「経済学の重要な部分」を構成して来た問題が解決されたことになるのである。advanced economic theory に習熟した人はいざ知らず、at elementary level の人にはこれでわかるであろうか。こういう説明に遭遇するのは、私のようなものゝ経済学散歩においてもこれが初めてではない。T・B・クラークがあり、A・マーシャルがある。しかし私にはいつものことながら、この種の説明に接する毎に、おとぎ話とししか思えないのである。資本主義の現象に生れ落ちるとからなすんでいるとしても、余りにも無理論にすぎはしないかと思えないのである。

私の言葉で私の批判を述べて見よう。財貨の生産のために土地と「資本」と労働は確かに共働する。しかし、それはさきに「所得の生産」の節で見たように、労働過程として、使用価値の生産としてのことである。そして、この過程の関する限り、個々の生産要因と生産物量との関係についてビグーの言うことは妥当する。労働も「資本」も貧弱なのに、例えば植民当初のアメリカなどのように一つの大陸をなすほどの土地があつても、その土地の増減によつて使用価値たる財の生産にはほとんど相違を生じないであろう。また、現在の朝鮮や、「本土決戦」のあとで降伏したであろう場合の日本のように、「資本」が兵火に焼かれ、土地が不毛の地とされた場合には、労働をいくら加えても生産には何の相違も生じな

いであろう。このように、使用価値の生産に関してはビグーの言う通りである。労働の等質化、資本の等質化——生産要因としての労働のところでビグーが述べているように、「能力を等しくする労働の量」に還元する以外に、いかにしてこのことが可能であろうか?——を前提すれば、このことは立派に数式で現わしうるであろう。恐らくは計画と統計の進んだ社会主義社会でなら、こういうことは現実に行われるでもあろう。資本主義社会においても個々の、ことに大きな企業においては行われているであろう。このようにビグーの言うところは、いやしくも土地と「資本」と労働とが生産に共働する限り、いかなる社会形態にも妥当する。すなわち地代・利潤・賃金ということの無い社会にもそれらのある社会にも、換言すれば私有財産制度のない、さらに「資本」の独占的所有者としての資本家階級も、労働力という商品しか販売し得ない労働者階級も存在しない社会にも、それらのものがある社会にも妥当する。ということはビグーが言っていることだけでは、土地—地代、資本—利潤(利子)、労働—賃金ということの説明にはならないということである。説明になつてゐるかのように思ふのは、思惟も生活も資本主義の枠内に閉じ込められている人間、したがつて資本主義社会の価値—剰余価値の生産過程を使用価値生産の過程としてしか考え得ない人間、そして土地には地代、資本には利潤(利子)、労働には賃金という関係が永久の現実として与えられていると前提している人間——そういう人間が労働過程のある意味での正しい「記述」をなすことによつて、資本主義の生産過程の「説明」ならまだしも、そうではなくて、それを飛び越えて「生産物の分配」の、いわゆる「所得の分配」の「説明」をなしたつもりになつてゐる、というだけのことにはすぎない。

も少し考えて見よう。土地と「資本」と労働とを共有している大家族、あるいは、共産部落を考えよう。この場合の生

産においては、ビグーの言う「純所得の総量」とはどういうことになるであろうか。さきに国民所得に関する定義のとこ
ろで見たように、生産要因が生産開始前の状態においてつぎの生産期間に引きつがれるということである。ビグーは小
麦だけが生産される場合を想定しているが、それは生産手段としても消費手段としても小麦だけが用いられるという場
合のほか不可能な想定であるが、われわれもその点は頗かぶりしておくことにしよう。右の部落が生産の後に一〇〇の
生産物を生産したとしよう。土地をもとのまゝにしておくためには何もすることはないはずである。以前に人間労働とそ
の生産物で土地に何かの施設を施しているのなら、それは「資本」に含まれることになるし、将来の生産のために何かを
しようとするならば、それは「新投資」になる、つまり「資本」になるだけのことだからである。それで土地には問題は
ないとし「資本」の原状恢復については磨滅分や消耗分を補えばいい。その分を二〇としよう。つぎに労働の原状恢復
であるが、その分として四〇が必要だとしよう。そうすると、 $100 - (20 + 40) = 40$ であるから「純所得の総量」は四〇
である。この事態に当面して部落の人々は何を考え、何をするだろうか。こゝで、この部落の人々が、複式簿記を心得、
支出と収入、使用価値と価値のことを資本主義社会から密輸入しているとすれば、土地「資本」と労働によつて四〇の剰
余を得た。「資本」は原状に復してあるのだから問題はない。労働は、四〇を消費しながら、八〇のものを生産したこと
になる、と考えるだけのことであろう。そして、その上で労働を軽減するか、生活内容を豊富にするか、または将来のた
めに備えるだけのことであろう。どこにも、土地―地代、資本―利潤、労働―賃金の関係は生じないであらう。

しかし、つぎのような場合も考えられる。この部落の人々は信仰心が強く、土地の神や「資本」の神を尊敬している。生

産が行われ、自分たちが生きて行けるのは神々のお蔭だと考える。そこで、さきの剰余のうち、三〇は土地の神に、一〇は資本の神に捧げる——こういう場合である。そして、部落の人々にとつては、この状態が万古を通じて不変のものであること言うまでもないが、われわれはこの人々よりは開明であるとしたら、これをどう見るであろうか。われわれでも今日、葬祭に際して同じことをやつているのであるが、もし右の神々に捧げられるものが腐り朽ちるに委せられるならば、それは浪費であつて、個人的消費のなかに含まれる。もし神主が存在して、神様に代つて消費するならば、これは剰余生産物の搾取である。われわれは、土地と資本と労働が共働したとは言うが、そしてその結果の剰余生産物が土地の神主と資本の神主の間に分配されたとは言うが、神主たちが共同したとは言わないであろう。搾取したのだと言うであろう。

こういう時、何かのはずみに、この神主たちが土地の所得者や「資本」の所有者になつたとしよう。そして、地主となり資本家となつた人々は、こんどは地代を受け、利潤を受けることになつたとしよう。つまり、資本主義になつたとしよう。こゝまで来た時、advanced economic theory の達人たちはともかくとして、at elementary level の人々は、私の説明と、私がおとぎ話——神話と言つた方がよさそうである——と呼んだビグーの「説明」と、そのどちらが客観的事態をヨリ忠実に描いていると思うだろうか。

こゝでビグーのために言つておくならば、われわれは、ビグーが資本主義社会に住んでいる土地所有者、資本家、そして多くの場合は労働者の心理を、あるいは「日常会話」を、そういう意味で客観的事態を、忠実に描いていることを否定するものではない。しかし、それはさきの部落の場合に持つてくれば、民族学や博物誌の仕事ではあつても、経済学の仕

事ではない。経済学は民族学や博物誌や心理学からも大いに学ばねばならないが、だからと言って、これらのものが経済学だとは言えないではないか、というだけのことである。^(註)

註 賃金の限界生産力説なるものについては、森耕二郎「賃銀理論の史的発展」労働文化社、昭和二四年、および「社会政策要論」日本評論社、昭和二五年に詳細明快な批判がある。

(イ) 生産諸要因の産業部門間への配分と、(ロ) それぞれの要因の一單位の「純利益」とについてのビグーの理論は以上に見て来たようなものである。ビグーは以上に見たような一般の命題を修正し、現実に近いとするために、種々の、そしてその限りでは正しくもあり興味あることを述べている。しかし、それはビグーのいわゆる advanced economic theory に近づくことであるからこゝでは触れないでおこう。右の(イ)と(ロ)とを結びつけることによつてわれわれは何を理解するであろうか。いつもながら、土地―地代、資本―利潤(利子)、労働―賃金という制度的が、いわば定性的なものが与えられていて、その枠のなかでいわば量的に当事者たちはどう考えどう動くかということだけである。at elementary level のものにはもつと別なものが必要であるように思われる。

四 ビグー経済学の性格

いままで見て来たことにもとずき、こゝでビグー経済学の性格を述べよう。その言葉として、資本論のつぎの言葉以上

に適切なものを私は知らない。

「俗流経済学のすることは、實際ブルジョア的生産事情に囚われてしまつてゐる生産管理人たちの觀念を學說的に通訳し、体系づけ、そして弁護するといふだけのことである。それゆゑ、俗流経済学者たちは、ほかならぬ経済的諸關係の疎外された現象形態のなかで、そこではこれらの諸關係は明かに不合理なものとなり、そして完全な矛盾となつて現われているのに——もつとも、事物の現象形態と本質が一致するなら、およそ科学は不用に歸するであろうが——ほかならぬこの現象形態のなかで完全に *at home* を感じてゐるが、それはわれわれを驚かすには足りないのである。そして、俗流経済学にとつては、経済的諸關係が現象形態で蔽されていればいるほど、だが日常の見方に適合すればするほど、そういった事情はますます自明のことであるように思われて来る。そこで彼らは、自分たちが出發する土地——地代、資本——利子、労働——賃金あるいは労働の價格という三位一体の公式は三つの明らかに不可能な結合であるということには些かも思ひ及ばないのである。まず、全く価値を持たない使用価値たる土地があり、そして交換価値たる地代がある。こうして一つの社會關係が、物として理解されて自然と比例關係に置かれる。すなわち、二つの通約されえない量が相互に關係を持つべきだとされるのである。つぎに資本——利子という關係。資本が或る貨幣に獨立に表現された価値として理解されるならば、一つの価値が自分自身の価値よりもヨリ大なる価値である、というのは明らかに背理である。ところで、まさに資本——利子という形態では一切の媒介が消え去つてゐる。そして資本はその最も一般的な、だがそれゆゑに自分自身からも説明され得ない、馬鹿げた公式に要約されてしまつてゐる。まさにそれゆゑにこそ、俗流経

済学者は、資本―利子という公式——一つの価値が自分自身に等しくない価値であるという不可思議な価値の性質を伴う公式——の方を資本―利潤という方式よりも好むのである、なぜならばこゝではまだ現実の資本關係にまだまだ接近しているからである。それから俗流経済学者は、四は五ではない、だから一〇〇ドルが一〇〇ドルに等しいということはある得ないはずだという胸騒ぎに襲われ、こんどは価値としての資本から労働の生産條件としての使用価値たる機械、原料等の方に逃げて行く。そこへ行つてこんどは、*the same* という理解のできない第一の關係の代りに、一方では一の使用価値、すなわち物、他方では一定の社会的生産關係、すなわち剰余価値——この二つの間から一つの全く通約できないものを——土地所有の場合のように引き出すのに成功する。一旦この通約すべからざるものに到るや否や、俗流経済学者にとつてはすべてが明瞭となり、そしてやはりそれ以上に思い煩う必要を感じなくなるのである。なぜならば、彼はまさにブルジョア觀念の「合理的なもの」に到達したのだからである。^(註)

最後に、労働―賃金、あるいは労働の価格というのは、すでに第一巻で証明したように、明らかに価値の概念に矛盾し、そして一般的にはそれ自身価値の一定の表現たる価格の概念に矛盾する表現である。「労働の価格」というのは黄色の対数というように不合理なものである。しかしながら、俗流経済学者はこゝでやつと初めて胸なでおろすことができるのである。なぜなら、いまや自分は労働に対して貨幣を支払うのだというブルジョアのいとも深き洞察に到達したからである。そしてまさにこの方式が、価値の概念に対するこの方式の矛盾が、価値の概念を理解するという義務を彼れから免するからである」(資本論、第三卷、第六篇、第四八章の三)

註 ビグーは、はじめは、生産要因として、現物の機械、原料等々としての資本を考えていた。ところが、同じく生産要因としての資本の所得の段になると、やはり現物を考えている——さきの引用にあるように——が、そうかと思うと突然、「資本が多ければ多いほど、それが取り得る利子率は低くなるだろう」(一〇五頁)と言っている。まるでマルクスの呪文にかゝっているみたいである。

それならばビグーの経済学は全く有害無用であるだろうか。そうではない。私は、他のところで^(註)ケインズの経済学は従来の簿記や会計などのいわゆる私経済学、あるいは経営経済学が、資本主義経済管理人の意識と実践を企業の経営に即して通訳し、学説化し、体系化しているように、そしてそうすることによつて経済学にとつても大きな貢献をなすように、同じく資本主義経済管理人の意識と実践を——ビグーの言う日常会話と社会の慣行を——国民経済全般の過程について通訳し、学説化し、体系化し——数式化も含んで——ようとしているものであり、そういうものとして、ことに実証的統計的な研究の面では——国民所得論、社会会計論、計量経済論など——して——経済学のために豊富な天然資源たるものである、と述べたことがあるが、ビグー経済学についても同じことが言えるであらう。そしてビグーが advanced economic theory と言っているのはまさにそういうものであるように思われる。

以上に見て来たように、経済学的にはおよそ支持し得ない基礎に立っているのであるから、その上で advance することはますます支持し得ない方向に發展するにきまつているかのよう^にに考えられやすいが、必ずしもそうではない。advance というのは現実あるいは現象に接近すること、そこに展開するいわば無限に複雑錯綜している事態^をあるいは全面

的に、あるいはある一部なりある側面なりについて記述し、整理し、体系化や数式化を施し、そうすることによつてこの人々に資本主義を説明しようとしているのである。天然資源の性質として玉石こんこうであらうことは当然予期されることであるが、しかしそこからいふ心で大いに汲み取ることをしていないならば、われわれは科学に忠実であるとは言えないであらう。

註 ケインズ経済学の体系と性格、中央評論、昭和二十六年一月号。

なお、さきにも引用したように、ビグーはエピソードで「戦時中に多くの経済学者がなした貴重な貢献」が経済学者の間に多くの共通地盤があることを示したと言っているが、こういう貢げんは、経済学のためという点から考えれば、ぼう大な実証的統計的知識の整理・蓄積ということである。こういう傾向は、戦後においてもますます強まりこそすれ弱まつてはいない。いま、詳しく論ずる準備を持たないが、各国における実情——経済界と政府と経済学者の共働とその経験の記録等——はこのことを裏書きしているようである。まさに「労働」と「資本」とをもつて開発すべき「天然資源」がわれわれの前に逡巡的に与えられているではないか。

このつぎのわれわれの課題は、右に述べた意味での advanced economic theory を紹介することであるが、それはわれわれが取り上げている著書の範囲を超えるものとして、他日を期すことにしよう。なお、この小論を結ぶにあたりわれわれが抛りどころにした「資本論」の限界をも明かにしておくべきであらう。マルクスはその第三巻第七篇第四八章「三位一体公式」の終りでつぎのように言っている——

「生産諸關係の物化および生産管理人たちにとつてのその独立化を敘述するにあたり、われわれは生産關係の諸關連が、世界市場、その景氣變動、市場價格の運動、信用の期間、産業および商業の循環、好景氣と不景氣の轉換を通じて、生産当事者たちから見れば圧倒的な、彼らを有無を言わせず支配する自然法則として現われ、そして彼らに対して盲目的な必然として自己を主張する仕方には立ち入らない。それは、競争の現實の運動はわれわれの計画の外にあるから、やらないのである。われわれは、資本制生産様式の內的組織を、いわばその理想平均において *sozusagen in ihrem idealen Durch schnitt* 敘述することである」(同上)